

腎 臓 内 科

小川 真

1) はじめに

臨床部門として腎臓内科がまがりなりにも独立したのは平成16年4月，国立大学法人化に伴う臨床科再編制の折りのことで，千葉大学医学部135年の長い歴史からいうとほんの最近です。しかし腎臓病学の診療・研究という分野については旧第一内科の第5研究室＝5研が長らくその任を負っていました。135周年記念誌は原則として100周年以後の歴史について述べるということになっておりますが，85周年，100周年記念誌では第一内科全体の記載となっているため，5研＝腎臓内科の歴史についてはなお記すべき内容があるように思います。

そこで本稿では，少し時代を遡って記述を始めたと思います。

2) 5研前期

5研の歴史は，石川憲夫教授が，新しい研究室を作られ「滲・濾出機転に関する研究」を始められたこと，そこで東條静夫先生（昭和23年卒，筑波大学腎臓内科元教授）が腎に関する研究・臨床を指導されたことから始まると伺っております。石川教授は，馬杉腎炎の名を残す病理学の馬杉復三教授の主治医であり，医学的交流を通じ，そのアレルギー・免疫の考え方に深く共鳴して研究室新設をされたということです。ここが，現在でも腎臓内科に受け継がれる免疫病理研究のルーツの一つであったことは明らかです。5研での研究は広範囲にわたり，腎機能電解質，体液，蛋白尿，臨床病理，腎炎，ネフローゼ，糖尿病性腎症，腎不全と多くの成果が発表されました。発足当時はまだ腎臓学会はできておらず，主に日本循環器学会に発表されていたようです。成田光陽筑波大学名誉教授（昭和28年卒）は，この時代のエポック＝メイキングなでき事として昭和34年の第二回日本腎臓学会総会（実質的には第一回総会）が，東京大学医学部本館大講堂で開催されたこと，その席で5研の業績を元に三輪清三教授がシンポジストに選ばれたことをあげておられます。広瀬賢次先生（昭和30年卒，図書館情報大学名誉教授）が，新潟大学で腎生検を学び，千葉にもちかえられたのも昭和30年代前半のことでした。

その後，東條先生は，dypyridamole（ペルサン

チンR）を腎炎の治療に導入し昭和48年には厚生省特定疾患「ネフローゼ症候群」調査研究班治療分科会会長に就任されるなど，腎疾患の治療に業績をあげられ，それと同時に多くの優れた研究者，臨床医を育成されました。そのお名前を記すだけでこのページがついてしまいましたが，代表的な方として，先にあげた先生方のほかに土屋尚義先生（昭和29年卒，元千葉大学看護学部教授），小林豊先生（昭和37年卒，元北里大学教授），若新政史先生（昭和38年卒，元附属病院卒後生涯医学臨床研修部教授），小山哲夫先生（昭和43年卒，元筑波大学教授）などがいらっしゃいます。昭和46年，奥田邦雄先生が第一内科教授に就任され，東條先生は昭和47年助教授に昇任。さらに昭和50年筑波大学の新設に伴い，臨床系医学系教授として就任され，多くの先生が千葉を後に筑波大学に移られました。

3) 5研中期

廣瀬憲次先生は昭和53年に第一内科講師に昇進され，ご専門である糖尿病腎症の研究・診療に従事されておりましたが，昭和58年図書館情報大学に転出されました。その後は若新政史先生が中心となり，研究・診療・教育にあたられました。若新先生は昭和38年千葉大学医学部御卒業で翌年第一内科に入局。三輪清三教授のご指導のもと，臨床医として研鑽をつまれるとともに研究面では東條，成田両先生のご指導の元，昭和50年4月に「正常尿蛋白の分析」で医学博士の称号を授与されました。また，この研究と並行して各種腎組織抗原の精製純化とこれを用いた実験腎炎モデルの作成，各種重金属による腎障害の研究，更には自己免疫性肝炎等の消化器疾患についても実験モデルを用いた研究を行われ，これらの研究成果を国内外の学会・雑誌で発表する一方，日本腎臓学会及び日本アレルギー学会評議員として学会にも貢献されました。この時代に若新先生のご指導をいただき，深夜まで研究した門下生としては家里憲二（昭和45年卒）上田志朗（昭和50年卒，現薬学研究院医薬品情報学教授），森義男（昭和50年卒），吉田弘道（昭和54年卒）などの先生がいらっしゃいます。第一内科講師として，学生教育にも精力的にとりくまれた先生は授業の際も「病因

第2章 医学研究院・医学部、附属病院の歩み

をつきとめるのが内科である」と繰り返し述べられ、私もその言葉に引かれて入局しました。「文献など読むな、自分で見たことだけを信じなさい」という言葉も印象的でしたが、後に若新先生が免疫学手法の手ほどきを受けた免疫学の泰斗多田富雄先生（昭和43年卒、千葉大学、東京大学免疫学教授を歴任）の講演をお聞きしたところ、多田先生ご自身も師である岡林敦教授（病理学、昭和37年第5回日本腎臓学会総会会長）から同じことを繰り返し言われたことをお聞きし、脈々と流れる伝統がこんなところにも隠されているのを知りました。

5研を含む第一内科を総括されていた奥田邦雄教授は診療や研究内容に直接指示されるより、国際学会や国際誌への発表を推奨され、原稿校閲の際にはその卓越した英語力を駆使されました。早朝から深夜まで教授室から鳴り響くタイプライターの音は多くの先生が印象的な思い出として語られています。奥田先生は昭和62年に御退官され、後任として大藤正雄教授（昭和29年卒）が就任されました。若新先生は平成2年2月に5研を上田志朗先生に託され卒業・生涯医学臨床研修部の教授に転出されました。

4) 5研後期

上田志朗先生は昭和62年助手、平成2年に講師に昇進され、若新先生の築かれた土台をさらに強固なものとされました。大藤教授が臨床研究重視の姿勢を明確にされたこともあり、腎生検による組織診断が積極的に行われるようになり、学会や雑誌への症例報告も増加しました。研究面では、若い研究者を基礎部門に派遣する機会が多くなり、牧野康彦（昭和61年卒）、濱野有紀（平成3年卒）らは、それぞれ免疫学、遺伝子情報学の分野で研究を行うとともにさらに留学して研鑽を深めました。大藤教授は平成7年に御退官となり、後任に税所宏光教授（昭和40年卒）が就任されました。

上田先生は平成9年4月より千葉大学大学院薬学院医薬品情報学教授に転出され、その後は小川真（昭和57年卒）が残り、税所宏光教授のご指導の元、腎臓内科分野の診療・教育・研究を行うことになりました。外来診療では引き続き上田志朗先生のご援助をいただいているもののマンパワー低下の影響は甚大で、中でも平成13年、牧野康彦先生が米国留学を終えて帰国し、新たな腎臓病の研究を開始した矢先に胃癌を発症し、34歳の若さで亡くなられたのは痛手でした。

5) 腎臓内科の出発

上述の如く平成16年に行なわれた診療科再編の結果、ようやく腎臓内科が誕生し、税所宏光教授が消化器内科医長と併任で医長となりました。臨床研修制度も変わり、大学病院の研修医が激減した中での厳しい出発でした。平成18年に東京医科歯科大学難治研究所から濱野有記先生が帰局して助教に就任。同年3月には税所宏光教授が御退官となり、後任として横須賀收先生（昭和50年卒）が就任され、引き続き腎臓内科医長を務められました。横須賀教授のご推挙により平成19年に小川が文部科学教官講師、千葉大学附属病院腎臓内科医長を拝命し、現在にいたっております。この間研究面では濱野助教を中心に、マウス腎疾患モデルを用いた腎炎進展・及び抑制機序に関する研究が行われ、臨床面では、難治性腎疾患の診療にあたると共に、地域医療施設と連携して慢性腎臓病（CKD）患者の効率的診療について検討しております。人工腎臓部との協力体制の確立、関連病院の整備・拡大など課題は山積しておりますが、後期研修医も平成20年度は一人、21年度は二人を迎え、少しずつではありますが、体制の整備が進んでおります。

（おがわ まこと）